

金剛流御詠歌における和讃の形成過程について

—天野山金剛寺所蔵の流祖肉声レコード調査報告—

元山慧香

はじめに

金剛流御詠歌は、1926（大正15）年4月に高野山大師教会内に設立された詠歌団体である¹。金剛流御詠歌に関する先行研究は、金剛流として形が整った時期について教典の変遷や楽曲を整理したものなどが存在する。ところが、管見の限りでは金剛流成立直後の時期についての研究並びに研究資料は見当たらない。そこで金剛流を大成した流祖として知られる曾我部俊雄（1873–1949）が住職を勤めていた「天野山金剛寺」において資料調査を行った。その結果、曾我部直筆のノートなどを含む100点を上回る新出資料を発見することができた。曾我部に関する一次資料については、これまでほとんど発見されておらず、金剛流御詠歌の成立前後における彼の活動内容やその人物像を研究する上で、この資料は非常に重要である。本稿では、それらの新出資料のうち、レコードや曾我部直筆のノートの内容整理を行うとともに、金剛流の和讃の形成過程に関して報告したい²。

1 金剛流御詠歌の設立

御詠歌団体の中で、最も成立時期が早いのは大和流であり、今日に伝承されているすべての詠歌団体のはじまりである。大和流に関して、新堀〔2008〕では、山崎千久松（1885–1926）により1921（大正11）年に設立され、その後、「基本十一節」³と呼ばれる十一種類の御詠歌の節が整理されたことや、大和流は師から弟子への口伝を第一とするため、譜面はもとより歴史や成立過程に関する文献が少ないことが報告されている。また、この大和流の「基本十一節」に関しては、山崎〔1986〕において具体的な節のラインナップが、譜面、歌詞とともに整理されている⁴。

そして、金剛流は大和流の成立後、当時の真言宗各派連合の動きに伴う形で、高野山大師教会において活動を開始している⁵。また、金剛流の発足初期、1929（昭和4）年に曾我部により発行された『高野山大師教会金剛講 御詠歌和讃詳解』には、金剛流の御詠歌の譜面として「金剛流大和節、金剛流京節、金剛流楊柳節、金剛流玉川節、金剛流入定和讃節、金剛流妙音節、金剛流誕生和讃節、金剛流修行和讃節、金剛流八葉節、金剛流巡礼節、金剛流札打和讃節、金剛流玉藻節、金剛流遍照節」の十三の節が収録さ

れている。新堀〔2013〕が指摘している⁶ように、これらは前述の大和流の「基本十一節」を始めとする既存の御詠歌の節をそのまま当時の金剛流式譜面にて記譜したものであり、金剛流の始まりが大和流「基本十一節」を中心としていたことは明かである。

しかしながら、大和流から金剛流に節が転用されていく変化の過程の詳細については、未だに解明されてはいない。そこで、その変化の過程に関して触れられている資料として、高野山金剛流御詠総本部〔2011〕を取りあげる。同書には、金剛流の成立初期に曾我部が金剛流の活動を開始したころの様子が示されているため、該当部分を以下に示す。

もっとも金剛流の流名は、昭和四年以前からあったもので、当時は大和流、妙音流等の詠歌を転用していた程度であったものを、曾我部流祖和尚が詠監に就任されて以来、旋法、音階、音譜等を今日のように合理的なものに漸次大成し、流儀の指導原理及び所作等を完成され、さらに新たな作詞・作曲を次々発表し、老後益々研究絶ゆまず、遂に今日のように他流に見ることの出来ない理念と名曲を持った「金剛流」を打ち立てられたのである。⁷

とあり、曾我部が活動を開始した後の金剛流の歩みはこれまでのものとは道を別にしており、曾我部一代において楽理や法式、指導原理が示された様子が記されている。このように現存している金剛流は、当時、曾我部により大成されたものであり、それらが時代を経て継承されたものである。そのため、現在では、曾我部が大成した金剛流の完成形のみが流布し、金剛流設立初期における和讃の形成過程を知ることはできない状況にある。本稿で用いる新出資料は、曾我部直筆のノートやレコードを含んでおり、この点を解決する一助となり得るものである。

2 天野山金剛寺所蔵のレコードについて

2-1 レコードの外観と収録音源

本稿で用いる天野山金剛寺所蔵の資料は、曾我部直筆のノート・教典・レコード・写真・楽理資料・布教資料・賞状・掛け軸・衣類など100点を上回る。本稿では、金剛流の成立過程を知る上で重要な資料の一つとして、これらのうちのレコードに関する調査を行うことにする。なお、本稿で用いる天野山金剛寺の資料については、そのすべての目録化および内容検討についてはほぼ終えている。レコード以外の資料に関しては、別稿を期したい。

本稿では資料のレコードに関して、①収録音源、②レコードの種類、③製作時期、④誰の音声なのか、の4点について検討を行う。

①収録音源

まず、レコードの収録音源に関して論じることとする。本稿で用いるレコードは、天

野山金剛寺に20枚所蔵されており、今回、天野山金剛寺のご厚意により、筆者は音源を調査する機会を得た。これらのレコードは、先行研究においてはその存在すら把握されておらず、当然のことながら調査・研究の対象にも上がっていない。また、レコードの音声に関する内容検討については、金剛流御詠歌の実践面での専門家（詠匠）である鴻野弘有氏と共同で研究を行った。

次の「表1」にレコードの収録音源内容の調査結果を示す。なお、資料番号は筆者が付したものである。⁸また、収録音源では節名が現在のものとは異なっている場合もある。そこでこの表には鴻野氏が特定を行った節名を、現在の金剛流で用いている節名で記している。天野節に関しては、同一のタイトルで、内容が複数存在するため、出だしの一節を（括弧内）に表記した。

さらに、レコードは保存状態が悪く、盤がたわんでいたり、溝に傷がついていたりしており、それぞれのレコード盤に収録されたすべての音源を再生することが出来なかった。そのため収録音源は、曲の途中までしか確認ができていないものが多く含まれている。それらには「†」マークを付した。

表1 収録音源一覧

資料番号	表面 (a)	裏面 (b)
D1001	日の本フォン家庭蓄音機のお披露目	† 謡
D1002	† 札打和讃	表面の傷により再生不可
D1003	楊柳	† 潮音
D1004	妙音（前半部）	妙音（後半部）
D1005	相互供養和讃	表面の傷により再生不可
D1006	光明（前半部）	光明（後半部）
D1007	† 光明	† 天野節（正平の君）
D1008	光明（前半部）	光明（後半部）
D1009	妙音（前半部）	妙音（後半部）
D1010	潮音	† 謡
D1011	天野節（天野よいとこ）	天野節（天野よいとこ）
D1012	無常和讃	† 金剛和讃
D1013	光明（鈴鉦付き、前半部）	光明（鈴鉦付き、後半部）
D1014	天野節（天野よいとこ）	天野節（河内の国の境）
D1015	天野節（正平の君）	天野節（正平の君）
D1016	玉藻	玉藻
D1017	玉藻	玉藻
D1018	未使用	未使用

D1019	未使用	未使用
D1020	未使用	未使用

次に表 1 の中で、レコード表面の傷により針が滑り再生ができなかった D1002b と D1005b、および未使用レコード D1018、D1019、D1020 を除く、その他の 32 個の音源について具体的内容を順に整理していくことにする。

D1001a：日の本フォン家庭蓄音機のお披露目：音源の収録時間は 1 分 28 秒であり、終始、明確に聞き取れる話声が収録されている。内容については、本稿において後で詳細を論ずるため、ここでは省略する。

D1001b：[†] 謡：収録時間は 1 分 18 秒である。しかし、うまく歌詞を聴き取ることが出来ず、現在のところ節を特定することはできていない。

D1002 a：[†] 札打和讃：収録時間は 1 分 25 秒である。音源は「さいごくだいいちばんにうつふだは きのくにむろのなちさん みねよりおつるたきつせの」までであり、これ以降の歌詞に関しての録音を確認できない。

D1003 a：楊柳：収録時間は 1 分 46 秒である。音源は「あめがした てらさぬくまもなかりけり たかののおくの のりのともしび なむへんじょうそん」である。

D1003 b：[†] 潮音：収録時間は 1 分 36 秒である。音源は「ふだらくや きしうつなみは みくまのの なちのおやまに ひびくた」であり、最後の「きつせ」の部分に関して録音を確認できない。

D1004 a：妙音（前半部）：収録時間は 1 分 38 秒である。音源は「ありがたや たかののやまの いわかげに」である。

D1004 b：妙音（後半部）：収録時間は 1 分 38 秒である。音源は一部音飛びがあるが「いしはいまだ おわしますなる」であり、音源の最後に「これで妙音のお唱え」と話声が収録されている。

D1005 a：相互供養和讃：収録時間は 1 分 29 秒である。音源は「ほとけにもな そのむかし こけのせんこう まじりなし ほどけておくも さきしよく さとりもやまを いでしより」である。

D1006 a：光明（前半部）：収録時間は 2 分である。音源は「となえたてまつる こうそうぼうだいしだいにばんの ごえいかに たかのやま むすぶいおりにそでくちて」である。

D1006 b：光明（後半部）：収録時間は 1 分 25 秒である。音源では、「光明」の音源に「光明」の音源が重複録音されており、ずれて重なった部分が聞き取りにくい、音源は「こけのしたにぞ ありあけのつき」である。

D1007 a：[†] 光明：収録時間は 1 分 36 秒である。音源は「たかのやま むすぶいおりに そでくちて」であり、これ以降の歌詞に関しての録音を確認できない。

D1007 b：[†] 天野節（正平の君）：収録時間は 56 秒である。音源は聞き取れない部分がほとんどであり、速度が不安定である。出だしの部分は「しょうへいの」であ

り、最後の部分は「ほととぎす」である。

D1008 a : 光明 (前半部) : 収録時間は1分29秒である。一部の箇所が速度が不安定かつ音飛びがある。音源は「たかのやま むすぶいおりに そでくちて」である。

D1008 b : 光明 (後半部) : 収録時間は1分20秒である。音源は「こけのしたにぞ ありあけのつき」である。出だしの「こけの」の部分の速度が不安定である。

D1009 a : 妙音 (前半部) : 収録時間は1分32秒である。音源は「ありがたや たかのやまの いわけに」である。

D1009 b : 妙音 (後半部) : 収録時間は1分20秒である。音源は「だいしは いまだ おわしますなる」である。

D1010 a : 潮音 : 収録時間は1分41秒である。音源は「ふだらくや きしうつ なみは みくまのの なちのおやまにひびく たきつせ」である。

D1010 b : 謡 : 収録時間は1分41秒である。しかし、現在のところ、うまく歌詞を聞き取ることが出来ず、節を特定することはできていない。

D1011 a : 天野節 (天野よいとこ) : 収録時間は1分36秒である。一部音源を聞き取ることができないが、音源の出だしは「あまのよいとこ かわちのくにて あまのあんぐう あまの」であり、途中に「さささのさ」という歌詞が存在し、最後は「ささにて」である。

D1011 b : 天野節 (天野よいとこ) : 収録時間は1分42秒である。ほとんどの部分で音源を聞き取ることができないが、途中に「いよのゆめやかなしけり でもたのしむほととぎす なも」や「さささのさ」という歌詞が存在し、最後は「あまのくにて」である。

D1012 a : 無常和讃 : 収録時間は1分26秒である。音源は「きみょうちょうらい へんじょうそん かすみにまごう さくらばな にしきおりなす もみじばも」である。

D1012 b : † 金剛和讃 : 収録時間は52秒である。音源は「きみょうちょうらいこん ごうかい しゃべつちしんの だいにちそん しほうし」であり、これ以降の文字に関する録音が確認できない。

D1013 a : 光明 (前半部) : 収録時間は1分28秒である。音源には鈴鉦が入っており、「たかのやま むすぶいおりに そでくちて」である。

D1013b : 光明 (後半部) : 収録時間は1分12秒である。音源には鈴鉦が入っており、「こけのしたにぞ ありあけのつき」である。

D1014 a : 天野節 (天野よいとこ) : 収録時間は1分22秒である。音源は「あまのよいとこ かわちのくにて あまのあんぐうに あまの」であり、それに続く部分が聞き取れないが、途中に「さささのささ」という歌詞が存在する。

D1014 b : 天野節 (河内の国の境) : 収録時間は51秒である。音源は「きみょうちょうらい へんじょうそん かわちのくにてのさかいなる」である。

D1015 a : 天野節 (正平の君) : 収録時間は1分34秒である。音源は「しょうへい

のむかし」ではじまるが、途中、「かなしけれ」、「なも」、「さささのさ」とある部分以外は歌詞はほぼ聞き取れない。最後の部分は「あまのさん」である。

D1015 b：天野節（正平の君）：収録時間は1分31秒である。音源は「のむかし」ではじまり、途中、「かなしけれ」、「ほととぎす」、「なも」とある部分以外は歌詞をほぼ聞き取れない。最後の部分は「さささのさ」である。

D1016 a：玉藻：収録時間は1分44秒である。音源は「ありがたや たかののやまのいわかげに だいしはいまだ おわしますなる」である。

D1016 b：玉藻：収録時間は1分49秒である。音源は「ありがたや たかののやまのいわかげに だいしはいまだ おわしますなる」である。

D1017 a：玉藻：収録時間は1分42秒である。音源は「となえたてまつる こうそ いちばんのごえいかに ありがたや たかののやまのいわかげに だいしはいまだ おわします」である。

D1017 b：玉藻：収録時間は1分28秒である。音源は速度不安定であり「となえたてまつる こうそ」で始まる。途中も速度が不安定のため聞き取ることはできない。その後、雑音のような音で「たかののやまのいわかげに だいしはいまだ おわしますなる」とある。

上述した音源を検討した結果、成立初期の金剛流と現在の金剛流において歌詞が同じであるのは、札打和讃、楊柳、潮音、妙音、光明、玉藻の6曲であることが判明した。他方、歌詞が現在のものと異なっているものは、金剛和讃、相互供養和讃であり、これらに関しては検討を行う必要がある。紙幅の都合上、本稿では、金剛和讃に関してのみ検討を行う。また天野節に関しては、歌詞に関する資料に乏しく、節を特定することができない。そのため、天野節の内容解釈に関しては、今後の研究課題としたい。

②レコードの種類

まず、資料となるレコードの外観写真（全体図・拡大図）を図1に示す。



全体図



拡大図

図1 天野山金剛寺所蔵レコード D1001

図1のレコード(D1001)は直径17.9cm、レコード袋は縦が18.2cm、横が18.5cmである。拡大図左のレーベルには「東京日の本商会 日の本フオン」、拡大図右のレコード袋には「吹込用レコード 日の本フオン 東京日本橋日の本商会」とあり、このレコードの種類は「東京日の本商会製の吹き込み用レコード」であることがわかる。当時、一般に市販されていたレコードとは異なり、音源が録音できるタイプのものである。あまり聞き慣れないタイプのレコードであるが、この吹き込み用レコードに関する資料として、『読売新聞』(1931年5月26日付朝刊の第6面)に「レコード簡易吹込機 日の本写音機」(製作販売は東京日本橋日の本商会)という広告が存在する。また、加藤[2006]にも関連する記述が存在する⁹。

③製作時期

次に製作時期について検討する。レコードの収録音源を作成した時期に関する資料として、D1014およびD1006のレコード袋の拡大写真を図2に示す。

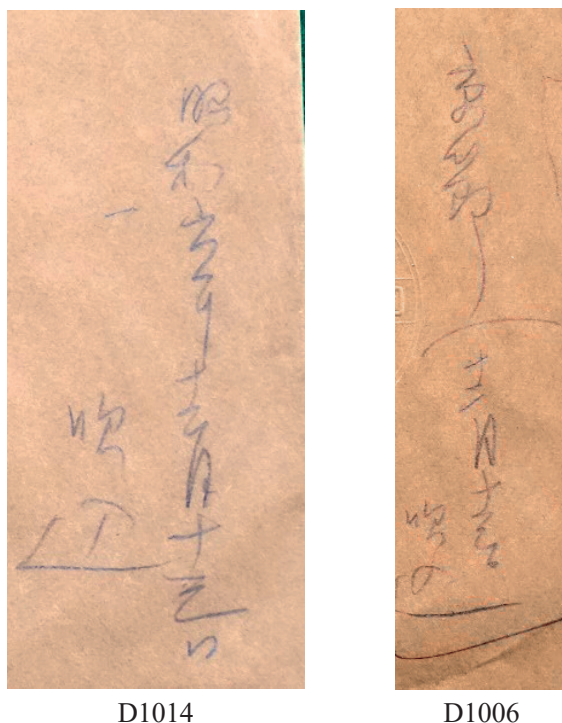


図2 D1014 および D1006 レコード袋の拡大写真

図2のD1014には「昭和六年十二月十三日 吹込」、D1006には「十二月十三日吹込」とある。これにより、これらの音源は、1931（昭和6）年12月13日に録音が実施されたことがわかる。このため表1のその他の音源についても、同時期に録音されたものと推測できる。

ここで、その頃の金剛流御詠歌の社会的な活動について触れておく。高野山金剛講総本部教師会〔1998〕〔1999〕によると、1930（昭和5）年9月に全国放送のラジオにおいて金剛流御詠歌の放送をしている¹⁰。

また、1930（昭和5）年4月にはコロムビアレコードから金剛流御詠歌10枚のレコードが販売されていることを確認している¹¹。

このようなことから、1931（昭和5）年12月に収録音源を製作することに、不自然な点は存在しない。

④誰の音声なのか

次に、このレコードの音源が、誰の音声なのかについて検討を行うことにする。この問題を解決する手がかりとなるのは、レコードの録音の経緯について説明をしているD1001a「日の本フォン家庭蓄音機のお披露目」の音源である。以下にその音源の書き起こし文を示す。

今日は、天野山金剛寺へ参りまして、家庭複音機、即ちこの日の本フォンの直接蓄音器に取り付けて、自分の発音で切り込みの出来ます日の本フォン家庭機を、お買い上げを頂くことについての支援をしたのであります。

大変ご立派な蓄音機に傷を付けまして、でなければ取り付けが出来なかったものですから、そんな風なことにして、只今、支援をしておるのでござんすが、始め、そして複（複音機か？）がよくなかったのは、全く機械の操作が悪かったので、だんだん加減がなおりまして、只今では無事にお伝えすることが出来るようになりましたことを、大変喜んでおります。

まず、この分であれば、ご使用時の折には少しも差し支えないと確信を致します。

どうかこのご縁によりまして、この機械が広く当寺の信者その他の方々に、ご理解を頂く事が出来ますれば、非常な光栄と成ります。さよなら

このように、「天野山金剛寺」、「当寺の信者」、「ご立派な蓄音機に傷を付けまして、でなければ取り付けが出来なかった」とあることから、D1001aの音源は、当時の天野山金剛寺の住職によるものであり、かつ録音機を購入した人物によるものであることがわかる。つまり、この音源の音声は、曾我部本人のものであることが理解できる。

続いて、D1001a以外のレコードの音源に関する検討を行うことにする。まず、図3としてD1017aのレーベル写真を示す。



図3 D1017a レーベル 拡大写真

図3には「高木 玉藻節」と記されている。「高木」とは、当時、金剛流で活動していた「高木泰澄¹²⁾」のことであると判断できる。レーベルに、節の名前が書かれているものはいくつか確認できているが、人名が書かれているものはこの1点だけである。

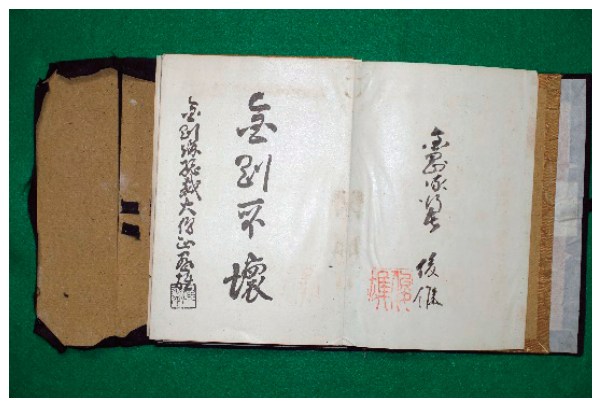
また、「高木」の音源であるD1017レコードを除いたその他の16枚のレコードの音声は、鴻野氏と著者が確認できた限りでは、前述のD1001aの音声と同一である。このように、表1の音源のうち、D1017レコードを除いたその他の16枚のレコードの音源のすべてが、曾我部によるものであることになる。そのため、表1で示したレコードの音源のほとんどは、これまで存在が確認されていなかった曾我部による「日常の話声・御詠歌・謡」であり、金剛流にとって非常に重要な資料であると言える。

2-2 金剛和讃

次に、成立初期の金剛流と現在の金剛流において歌詞に相違が見られるため、「金剛和讃」の検討を行うことにする。「金剛和讃」は、全部で19節から構成されている。金剛流詠歌研究室[2016] pp.6-21 には、1929（昭和4）年に曾我部により作成された経緯と、その歌詞が持つ意味について触れられている。「金剛和讃」は金剛流御詠歌の指導原理であり、詠歌道の指針として位置付けられており、とりわけ重要な和讃とされている。また、高野山金剛講総本部教師会[1998] p.131 には、「金剛和讃」の譜面は1931（昭和6）年4月に発表されたと記されているが、筆者は未見である。なお、高野山金剛講総本部教師会[1998] が言及しているのは、節が付いた「金剛和讃」のことであり、歌詞のみであれば、「1930（昭和5）年に曾我部によって出版された教典」（以下、曾我部[1930]）に収録されている。

ここでD1012b所収の「金剛和讃」の音声に注目すると、第1節のみ現行の歌詞と異なっている。そのため本稿では、諸資料における第1節のみをとりあげる。

また、その比較対象として、曾我部[1930] と、B1004「曾我部本人が使用した教典」における「金剛和讃」を使用する。なお、このB1004も天野山金剛寺から新たに発見された資料であるため、図4として提示する。



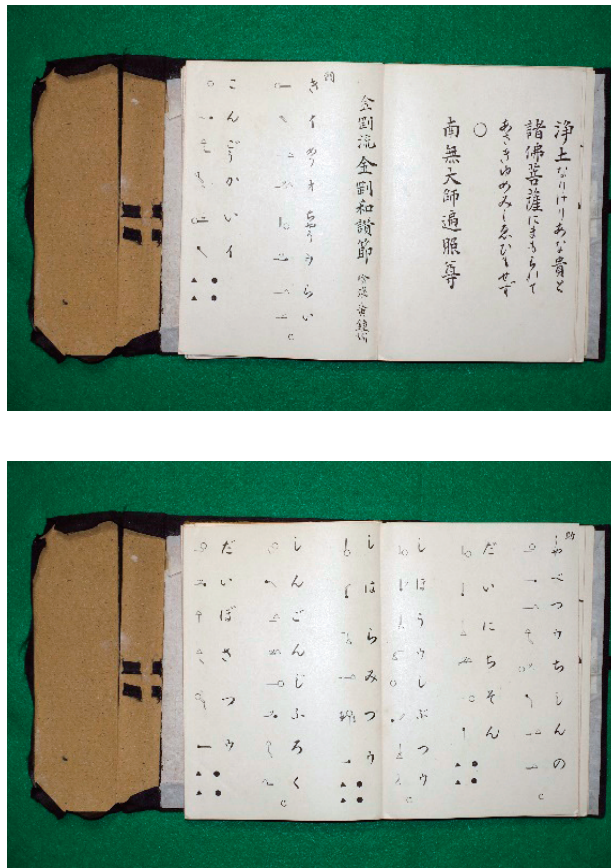


図4 天野山金剛寺所蔵 B1004 教典

次に、①「D1002b」の音声、②「B1004」曾我部本人が使用していた教典、③曾我部[1930]、④「現行の教典」といった4種類の資料における「金剛和讃」の第一節の歌詞を示し、比較してみる。

- | | |
|------------------|--|
| ① D1002b 音声： | 帰命頂礼金剛界 <u>差別智身</u> の大日尊
四方四仏四波羅蜜 親近十六大菩薩 |
| ② B1004 曾我部使用教典： | 帰命頂礼金剛界 <u>差別智身</u> の大日尊
四方四仏四波羅蜜 親近十六大菩薩 |
| ③ 曾我部[1930]： | 帰命頂礼金剛界 <u>差別智身</u> の大日尊
四方四仏四波羅蜜 親近十六大菩薩 |
| ④ 現行教典： | 帰命頂礼金剛界 <u>智差別門</u> の大日尊
四方四仏四波羅蜜 親近十六大菩薩 |

このように、「差別智身」（①②③）と「智差別門」（④）の部分が異なっていることがわかる。つまり D1012b と B1004 と曾我部 [1930] の「金剛和讃」の歌詞は、現行の教典より古い内容の歌詞であることになる。そのため D1012b の音声は、「金剛和讃」の発表直後の貴重な音源であることがわかる。

2-3 光明

次に、「光明」に関しては、レコードの音源を聞く限り歌詞は現行のものと相違はないが、節に関しては相違が見られるため、譜面を用いた検討を行う。

まず、譜面の検討に入る準備段階として、金剛流御詠歌において「和歌」と呼ばれている「五七五七七」というリズムの数種類の詠歌に関する歌詞と節の関係について整理を行う。始めに歌詞に関して、金剛講総本部 [2011b] 『高野山金剛流御詠歌教典』 pp.14-15 には「弘法大師御詠歌」・「高野山御詠歌」とし、(1)「有り難や 高野の山の岩陰に 大師はいまだ 在しますなる」、(2)「高野山 結ぶ庵に 袖朽ちて 苔の下にぞ有明の月」、(3)「阿字の子が 阿字の古里 立ち出でて また立ち還る 阿字の古里」、(4)「高野山 山にはあらで 蓮葉の 花坂登る 今日の嬉しさ」、(5)「忘れても 汲みやしつらん 旅人の 高野の奥の 玉川の水」、(6)「天が下 照らさぬ隅も なかりけり 高野の奥の 法の灯」の6つの歌詞が特に重要であるとして挙げられている。これらの歌詞を唱える時は、i「金剛」、ii「光明」、iii「梵音」、iv「妙遍」、v「玉川」、vi「楊柳」という古くから継承されている節を用いることが一般的である。つまり、歌詞と節の組み合わせは36通りあることになり、特定の詠歌を「光明」であると決定づけるものは、歌詞ではなくその節である。さらに、i～viの節のうち、大和流から継承されている節は、ii「光明」、iv「妙遍」、v「玉川」、vi「楊柳」であることから、「光明」は金剛流設立当初からの歴史ある節の一つであり、現在においても日常的に唱えられている。このように、「光明」は歴史的にも実践面においても重要な節であると言える。

次に、節の名称の変遷について触れておく。これに関する先行研究として、新堀[2013] p.48 は、「1933年には大和流の節をそのまま採用した「大和節」、「京節」、「中和讃節」をそれぞれ「妙遍」、「光明」、「龍華」と改称しており」と述べ、節名が変更したことを報告している。さらに金剛講総本部 [2011] 『高野山金剛流御詠歌綱要』 p.4 においても、同様の記述が確認できる。このような節名の変更の過程を知る資料として、現在、一般に流布している曾我部 [1930] [1934] の「光明」の譜面を図5として提示する。

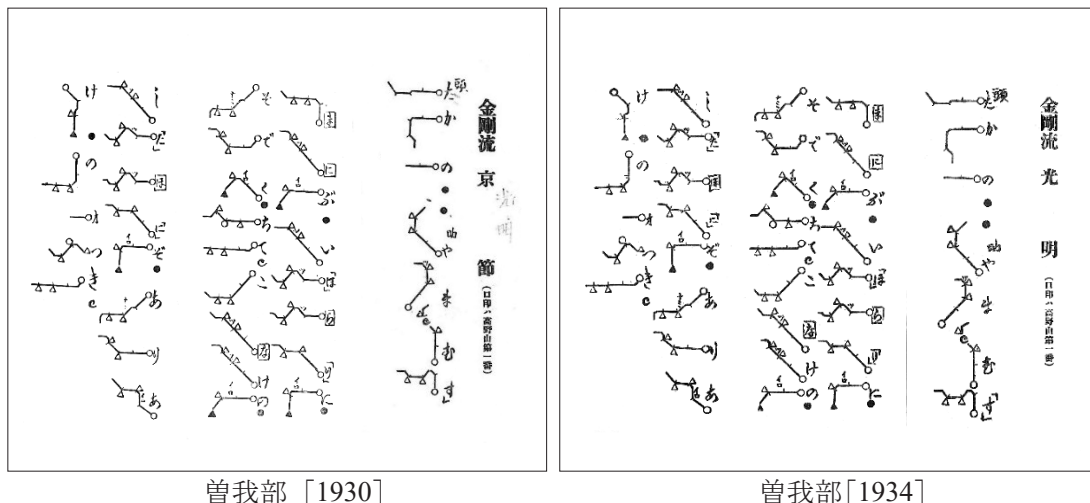
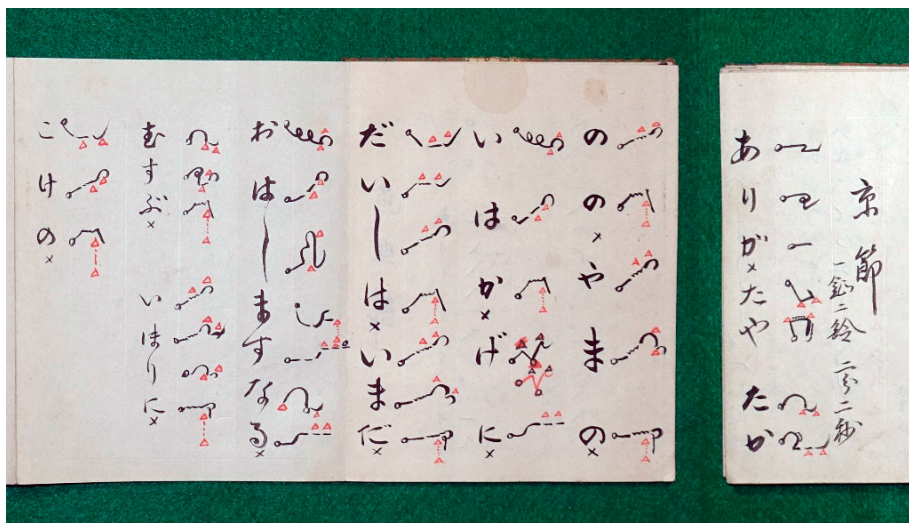


図5 曾我部 [1930] [1934] における「光明」の譜面

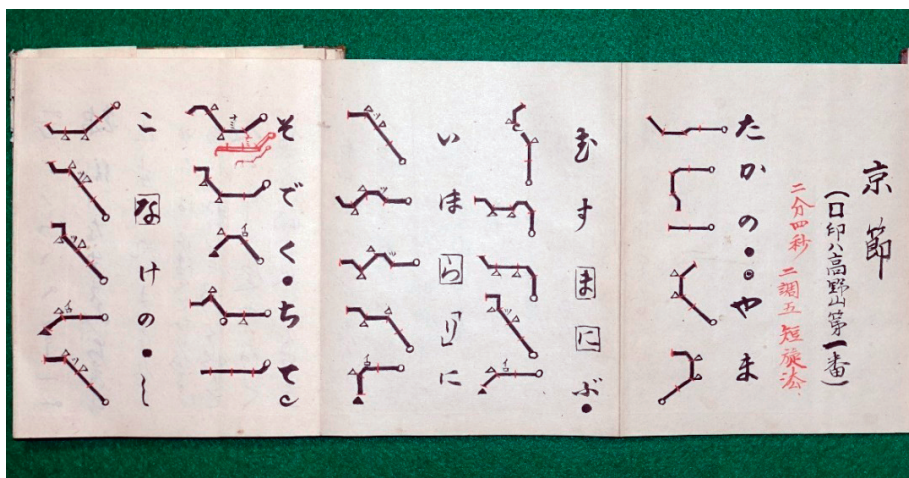
まず、譜面の記述方法に関して説明を行う。図5（曾我部 [1930] [1934]）における歌詞は「たかのやま むすまにぶ いほらりに そでくちて こけのしたほにぞ ありあけのつき」であり、両者の歌詞は一致している。ここで、歌詞が先述の「高野山 結ぶ庵に 袖朽ちて 苔の下にぞ 有明の月」ではない点について説明を行うことにする。歌詞の中に意味の通らない不自然な文字がいくつか見られる。これは、歌詞を変えて唱えるときの補助的な譜面が意図的に記されているためである。つまり実際には、この譜面では、すべての譜を唱えるのではなく、歌詞に合わせて譜を選択し唱えているのである。この場合では、「たかのやま むすまにぶ いほらりに そでくちて こけのしたほにぞ ありあけのつき」における下線部の箇所のみ唱えることになる。

次に、図5（曾我部 [1930] [1934]）において両者の譜を比較すると、いずれの文字も譜が同一であることがわかる。これより、これら2つの譜面は、歌詞・節ともに一致しており、異なる点は節名のみである。曾我部 [1930] では、「金剛流 京節」とされていたものが、曾我部 [1934] では「金剛流 光明」とされていることから、「京節」と「光明」は呼称のみを変えたものである。このように、先行研究で言われているように「光明」は、金剛流の成立初期においては「京節」という名称が用いており、その後、「光明」に変更している。

さて、筆者による天野山金剛寺における調査により、曾我部自筆の「光明」の原型の譜面を新たに発見することができた。この譜面は「大和流の譜面」と「現行の譜面」の中間に位置するものと推定される。そこでこれらの譜面について、以下で比較を行う。



B1006 の表面



B1006 の裏面

図 6 B1006 における「光明」の譜面

この図 6 (B1006) は、曾我部自筆の金剛流御詠歌の教典（年代不詳）である。現在の「光明」と節は変わっていないが、譜面の表記法が異なっている。これに関しては、高野山金剛講総本部編 [2004] に詳細な説明が述べられている¹³。

さて、図 6 (B1006) の表面と裏面では、記述されている歌詞は異なっているが、譜は同一であることから、替え譜であると判断できる。そのため、譜を比較することに関しては問題がない。ここで図 6 (B1006) の表面は、譜面の形状から大和流から金剛流に移行する段階のものであり、金剛流成立初期における譜面であると推測できる¹⁴。

これに関して本稿では、写真資料の公開にとどめ、詳細な内容検討は別稿を期したい。

次に図6 (B1006) の裏面を見ると、「そでくちて」の「そ」の部分に2種類の朱書きがある。そこで、この「そ」の部分の朱書きに関する検討を行う。図5 (曾我部 [1930]) と図6 (B1006) から「そでくちて」の「そ」の譜を抜きだし、図7に示す。

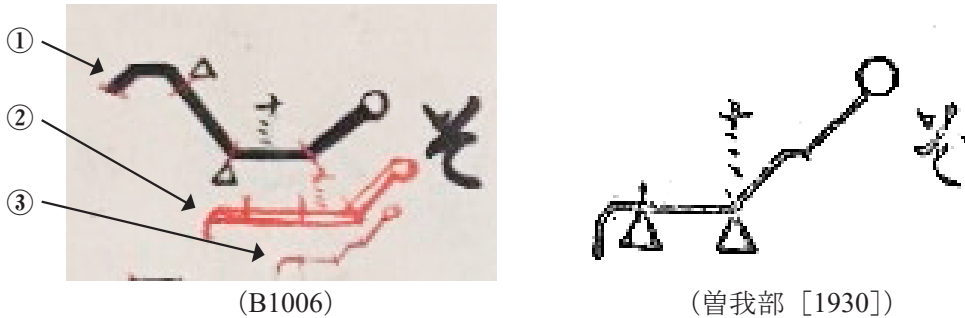


図7 「京節」の拡大「そ」

この図7 (B1006) の「そ」は、①、②、③の3つの異なる譜面が記されている。このように「そ」の部分に2種類の朱書きがあり、曾我部により2度、音階の訂正が行われていることがわかる (図7の②と③)。このうち、一番下の③が、曾我部 [1930] と同一である。さらに、図7の曾我部 [1930] における「そ」は、現在の譜面と同じ節であることから、B1006の①②③では、③が最も新しいことになる。これにより、これまでは「京節」と「光明」は、曲の呼称を変えただけで、節は同じであるとされてきたが、実際は、曾我部により金剛流独自のアレンジが加えられていることが新たに判明した。これまで曾我部に関しては、多才であるため、天才的なひらめきで御詠歌を大成したのではないかと考えられていた面もあったが、今回の朱書きの入ったB1006により、実際は何度も朱を入れ形を変え、現在の形に変遷しており、そのような努力の結果が現在の金剛流につながっていることがわかった。

また「大和節」等のB1006における今回とりあげなかった御詠歌に関しても今回の「光明」と同様に複数の段階を経て、現在の形になったことがわかっているが、それについても別稿を期したい。

まとめ

本稿では、天野山金剛寺所蔵の新出資料に関して、レコードの整理および内容検討と、二つの和讃の変遷について検討を行った。レコードに関しては、①収録音源、②レコードの種類、③製作時期、④誰の音声なのか、の4点について検討を行った。その結果、①32種類の音源からなること、②東京日の本商会製の吹き込みレコードであること、③1932 (昭和6) 年12月13日であること、④曾我部俊雄と高木泰澄の音声であること、が判明した。

また、二つの和讃の変遷に関しては、「金剛和讃」と「光明」を扱った。「金剛和讃」に関しては、第1節の歌詞に「差別智身」と「智差別門」という相違点が存在していることがわかった。今回発見できたD1012bの音声は、古い譜面のものと一致するため、「金剛和讃」の発表直後の貴重な音源であることが判明した。「光明」に関しては、これまでは大和流の節を直接採用し、「京節」と「光明」は名称を変えただけで節が同じであるとされてきた。今回の調査によって歌詞は変わっていないものの、節に関する変遷が存在することが判明し、曾我部により金剛流独自のアレンジが加えられていることが新たに明らかとなった。さらに、一度で節が決まったわけではなく、曾我部も悩みながら最低2回の修正が加えられて、現在の節となったことが判明した。

今後は、大和流から金剛流への移行過程を解明するために、他の御詠歌の音声および譜面の変遷について調査を継続する予定である。

参考文献

〈一次資料〉

『高野山時報』，高野山出版社

[1950]900号．

『聖愛』，高野山聖愛社

[1930]34,35号．

『読売新聞』，読売新聞社

[1931]19489号6面．

『六大新報』，六大新報社

[1923]1042号．

〈二次資料〉

加藤玄生

[2006]『蓄音機の時代』ショパン．

高野山金剛流詠監室

[2011]『金剛講必携』高野山金剛講総本部．

高野山金剛講総本部教師会

[1998]『追想』高野山金剛講総本部．

[1999]『金剛流教師心得十箇条』高野山金剛講総本部教師会

高野山金剛講総本部

[2004]『金剛流詠歌道講録』高野山金剛講総本部．

[2011a]『高野山金剛流御詠歌教典』高野山金剛講総本部．

[2011b]『高野山金剛流御詠歌綱要』高野山金剛講総本部．

金剛流詠歌研究室

[2016]『金剛和讃と曼荼羅 Q&A』高野山金剛講総本部．

曾我部俊雄

[1930]『高野山大師教会金剛講 御詠歌和讃詳解』高野山金剛講総本部.

[1934]『高野山大師教会金剛講 御詠歌和讃詳解』高野山金剛講総本部.

[1932]『金剛流音譜教典』高野山金剛講総本部.

新堀敏乃

[2008]「一九二〇～三〇年代における大和流ご詠歌の成立過程」

『東洋音楽研究』73, pp.63-75.

[2013]『近代仏教教団とご詠歌』勉強出版.

日本蓄音機レコード協会

[1931]『コロムビアレコード 邦楽・洋楽 4月新譜』

山崎千久松

[1986]『奉詠大和流各宗讃佛歌集』大和講総本部.

- 1 金剛講の発足年月日については、本稿が採用した高野山金剛講詠監室 [2011] p. 7 および高野山金剛講総本部教師会 [1999] p. 33 による説と、金剛講総本部 [2004] p. 222 による 1925 (大正 14) 年 4 月に発足されたとする説がある。
- 2 内容整理に関してはすでに 2019 年度密教研究会で発表を行い、その成果は『密教文化』に掲載される予定である。またレコードに関しては金剛講運営委員会 (2019 年 10 月 8 日、於：高野山真言宗金剛峯寺宗務所) において、高野山大学佐藤隆彦教授、および共同研究者である鴻野弘有氏とともに発表を行う機会を得た。その機会を与えてくださった橋本真人氏には厚謝しております。
- 3 新堀 [2008] によると、大和十一節とは、大和流御詠歌の①大和節、②京節、③木楊節、④中和讃節、⑤木槍節、⑥大和和讃節、⑦入定和讃節、⑧岩舟和讃節、⑨巡礼和讃節、⑩総本部和讃節、⑪追弔和讃節、である。
- 4 山崎 [1986] pp. 5-24 によると、大和流基本十一節は、①大和節、②京節、③木楊節、④入定和讃節、⑤大和和讃節、⑥岩舟和讃節、⑦巡礼和讃節、⑧木槍節、⑨天竺和讃節、⑩大和流々祖追悼和讃節、⑪追弔和讃節、であるとしている。
- 5 『六大新報』1042 号 (1923) を参照。
- 6 新堀 [2013] の「第二節 金剛流の成立」pp. 46-49 である。
- 7 金剛講総本部 [2011] p. 3 「金剛流と流祖和尚」を参照のこと。
- 8 資料番号は元山によるものであり、5 桁の英数字で構成される。資料の内訳項目は、A: ノート (ノート・原稿用紙・メモ・便箋・半紙)、B: 教典 (教典・譜面・本)、C: 金剛講資料 (布教資料・その他)、D: レコード、E: 写真、F: 手紙 (手紙・はがき)、G: その他 (卒業証書・衣類・掛け軸・楽器) である。詳細は 2020 年度に刊行予定の『密教文化』に掲載予定である。
- 9 加藤 [2006] pp. 162-164 の「家庭録音」において日の本写真機の記述が見られる。
- 10 高野山金剛講総本部教師会 [1998] p. 131 には、「昭和五年九月二十一日 JOBK より金剛流御詠歌を全国放送す」とあり、同 [1999] p. 33 には「昭和五年 金剛流御詠歌ラジオ放送 (九月)」とある。これに関して、『聖愛』昭和 5 年 10 月号 (1930) p. 33 の「御詠歌放送する迄」からは、ラジオ放送に至った経緯や放送前後の様子などを把握でき、またさらに同 11 月号 (1930) p. 12 に

は当日の放送局内の写真が掲載されており、現場の様子を知ることができる。

- 11 曲名に関しては、日本蓄音機レコード協会[1931]p. 5によると、「コロムビア邦楽レコード四月新譜」①金剛流遍照節、②同遍照節・同揚柳、③同入定和讃、④同大和節、同巡礼節、⑤同八葉節、⑥同妙音節、同大和節、⑦同京節、同修業和讃、⑧同誕生和讃、⑨同札打和讃、同玉藻、⑩同玉川節、である。また、同 p. 10 の「コロムビアレコード（邦楽）四月新譜解説」欄には、「金剛流御詠歌は全国的に普及されて居ますが、それをレコードとして発売せよとの要望の声大なるに刺戟されて、弊社はここに高野山大師教会金剛講総本部認定詠監曾我部俊雄僧正に乞ふてその監修の下に各権威を網羅してこの宗教レコード十枚を発売いたしました」とあり、販売の経緯や金剛流御詠歌の盛況ぶりを伺い知ることができる。
- 12 高木泰澄（島根県太田市圓應寺）は、金剛流御詠歌詠監（1953（昭和 28）年）であり、金剛講設立当時から活躍が認められ、初代の金剛講専属参事に就任している（高野山時報 900 号 20 面）。
- 13 高野山金剛講総本部編[2004] pp. 153-162 には、五声を用いた譜面表記と、十二律を用いた譜面表記の違いに関する説明が存在する。
- 14 大和流の譜面（山崎[1986]）を入手済みであり、それらと比較すると、譜の表記方法が近い。

（本稿の執筆にあたり、天野山金剛寺の堀智真住職には曾我部流祖関連資料の利用許可および掲載許可をいただき感謝しております。また、高野山大師教会金剛講総本部には、御詠歌教典の資料提供および掲載許可をいただき厚謝しております。さらに本研究を遂行するにあたり曾我部流祖のご遺族である田辺高山寺の曾我部大剛住職とそのご家族の皆様には、寛大なる心でもって迎えてくださった上、曾我部流祖に関する新聞などには記されていない貴重な情報をお教えいただき深謝しております。）

キーワード：金剛流御詠歌 天野山金剛寺 曾我部俊雄 金剛和讃 光明